「黄色い壁紙」から逆転と矛盾の様相を読み解く

江頭理江

1. はじめに

Charlotte Perkins Gilman は、19 世紀末に女性の権利拡張を訴えた文筆家である。ギルマン自身の体験を基に、出産後の憂鬱症に陥った女性が、療養のための屋根裏部屋に閉じ込められ、医師である夫から、夫が効果的であると考えるケア（安静療法）を受け、狂気に陥る様子が、女性自身の声で語られる。何度もナレーターである「私」は、夫のやり方に異を唱えるが、夫は全く受け入れない。この状況は、「ケアの倫理」の中で、キャロル・ギリガンが「苦悩」を擁護することや、小川公代が記す「声」を聴こうとする営為と、真逆にある。夫は、妻の声に全く耳を貸さず、妻を子ども扱いする。妻の知的レベルは低いのだと偏見を持つ、夫の姿も作中ではしばしば見える。

シンポジウムにおいては、Gilman に加えて、Kate Chopin の"The Story of an Hour"、さらに比較の意味で 20 世紀の William Faulkner の "A Rose for Emily"、Raymond Carver の"Cathedral"を取り上げ、声を聴くこと、偏見に囚われること、慮ることの３観点を中心とした読み解いた。

2. ギルマンー他者を理解しようとする声の欠如 / 配慮の偽装 / 偏見への固執/ 偽装のケア

ギルマンは、1860 年、コネティカットのハートフォードの生まれ、父が Harriet Beecher Stowe の甥という、家柄に生まれた。1880 年には最初の詩が雑誌に掲載され、1884 年に画家の卵であった Charles Walter Stetson と結婚、1885 年に娘が生まれる。産後の鬱症状に悩まされたのは、1885 年から 1886 年頃のことで、その間の様子は彼女の自伝の中にも記されている。「安静療法」を提唱した Silas Weir Mitchell 博士に関する記述もある。ミッチェル博士の治療法とは「家庭的な生活」を送ることに力点が置かれているわけだが、ギルマンに「家庭的な生活」「家庭的な女性」になることを強いたのは、夫もまた然りであった。夫婦はその後、離婚している。この間の状況が、ギルマンを「黄色い壁紙」執筆へと突き動かした。

冒頭、夫は妻のことを病気であるとは考えておらず、ただのヒステリーであると確信している。夫は郊外の一軒家を借り、その部屋の最上階を妻のための療養部屋と一方的に定め、妻がいくら眺めのよい階下の部屋を使わせてほしいと嘆願しても、「あなたのためだ」と繰り返し、決して妻の願いを聞き入れない。壁紙がはがされている部分もあり、「私」はその壁紙を「生涯で最もひどい壁紙」と描写する。特に壁紙の黄色について、「不快で吐き気がするようなくすぶった不潔な黄色、太陽に照らされて色褪せた」(133) 黄色と描写する。その部屋に妻を押し込んだ夫は不安を訴える妻のことを笑う。そしてこう言うのだ。「そんなものはほっておけ」。

この短篇においては、文章は短く端的なものが多い。妻の自問自答が繰り返され、読者は妻の声を直接聞くことができる。しかしながら、夫は、妻の声を聞かない。聞いても、彼自身の理屈ですべてその訴えを否定する。妻が語る夫の声は、間接話法で記されたものが多く、それが真に夫の言葉なのかは、１人称の語りである限り、疑問も沸く。夫の声が直接読者に届く場面、具体的には直接話法で語られる部分は少ないが、例を以下に挙げる。

> "You know the place is doing you good," he said, "and really, dear, I don't care to renovate the house just for a three months' rental."
>
> "Then do let us go downstairs," I said, "there are such pretty rooms there."
>
> Then he took me in his arms and called me a blessed little goose, and said he would go down cellar, if I wished, and have it whitewashed into the bargain. (133)

妻を「信愛なる」と呼びかけながらも、決して妻の願いを聞かず、妻を子ども扱いし続ける夫の姿が描かれている。この夫婦には、声による言葉のやり取りが成り立たないのである。妻である「私」が語る、間接話法による夫の言葉には中身がない。夫と真の会話は成立せず、小川が指摘する「自分と他者との関係性により正直になり、自身に対する応答性をよりよく持つような声」（『ケアする惑星』024）によるコミュニケートは全く存在しないのである。夫は、自らの行為のすべてを、妻への愛、妻への共感と配慮によるものだと、表面的には見せる。妻も、夫の言動を、自分への愛と配慮の故と言い、自分自身を納得させ続ける。このような関係性の中で、妻はある夜、黄色い壁紙の中から女が這い出そうとしているのを見る。妻はこの女たちと自らを同一視するに至り、物語は以下のような結末を迎える。妻自身が療養部屋をはい回り、夫はそれを見て卒倒する。その夫を妻は這いながら、何度も乗り越えていく。

> "What is the matter?" he cried. "For God's sake, what are you doing!"

I kept on creeping just the same, but I looked at him over my shoulder.

"I've got out at last," said I, "in spite of you and Jane! And I've pulled off most of the paper, so you can't put me back!"

Now why should that man have fainted? But he did, and right across my path by the wall, so that I had to creep over him every time! (144)

夫が装い続けた「詐欺のケア」はここで完全に露呈した。声の欠如、配慮の偽装、偏見への固執は、「詐欺のケア」を生み出したのだ。

3. Kate Chopin―"The Story of an Hour" 効果なき配慮 / 声の欠如 / 効果なきケア

ギルマンと同時代の作家で比較されることも多い、Kate Chopin の"The Story of an Hour"においては、夫の死の報せを受け取った妻は、悲しみにくれるものの、まもなく自分自身の魂に自由がもたらされることを実感する。しかしながら、実は死の報せは間違いで何も知らないまま帰宅した夫の姿を見て、彼女は心臓発作により死亡する。夫の友人と彼女の妹は、彼女が自室に閉じこもり、そこで自らの自由を実感したことを知らない。それは彼女をそっとしておこうという二人の配慮であった。医者は、彼女の死を、夫の生存を知って、喜びのあまりの心臓発作によるものと診断する。夫の友人と彼女の妹も同様の見解であったと見える。声によるコミュニケーションの欠如と、効果なき配慮がもたらした悲劇である。

4. William Faulkner "A Rose for Emily" 対話の欠如 / 偏見 / ケアの消失

20 世紀の物語においても、「ケア」の諸相が見て取れる。William Faulkner の有名な短編である"A Rose for Emily"の中で、我々は"care"を発見する。旧南部の名家の娘エミリーは、家柄を重んじる父のため結婚もできず、恋仲となった男は去ってしまい、時代遅れのお屋敷で、10 年も誰も訪れることのない生活を送っている。市長であるサートリスは、エミリーの税金を免除するのだが、細かい理由は書かれておらず、エミリー自身が町にとっての「伝統、義務、ケアである」とされている。エミリーへの配慮あるケアを行った世代から、次の新しい世代が町の中心となった時、エミリーへのケアは消失する。物語の最後、恋人フォーマー・バロンのミイラ化した遺体と添い寝していたであろうことを意味するエミリーの銀髪をその傍らに見たとき、我々は、「ケア」の欠如がもたらした、そして偏見と因習に満ちた社会を生きざるをえなかった女性の悲劇をまたしても目撃するのである。

5. Raymond Carver "Cathedral" 偏見の消失 / 視覚を閉じた声の対話 / 真のケアの可能性

さらに、時代を進めたとき、我々は「ケア」に関する一つの印象的な短編に行きつく。Raymond Carver の"Cathedral"は、ある夫婦のもとを妻の友人である盲目の男が訪問し、最後には夫と盲人が一緒に大聖堂の絵を描くという物語である。夫は、盲人に偏見を持ち、食事時の気配りなど、表面的配慮は見せるものの、盲人への偏見はなかなか消えなかった。視覚を閉じ、声のみで誘導しあいながら、大聖堂を描く協働作業の最後に、夫が至った境地が"It's really something"なのである。声によるコミュニケ―トが、夫から盲人への偏見を消し去り、アメリカ文学的に捉えようとすれば、ある種の成長とも言えうる変化を読者に見せている。実際に見ることだけが、すべての見ることではないことを、夫は知るのである。偽装でない「真のケア」が生まれた瞬間である。

19 世紀末から 20 世紀に至るアメリカの、時代変化の中で、「偽装のケア」「無意味なケア」の様相を、物語世界の中で読み解いた。「ケア」の欠如がもたらした悲劇的様相も、観察した。カーバーの「大聖堂は」1980 年代の作品であるが、ほぼ男性のキャラクターで物語が構成され、作家自身も男性であるこの物語を、「ケアの倫理」で読み解いた時、我々は、「真のケア」の一つの姿を見る。「ケア」はどのような場面においても、創出されうるのではないか。ヤングケアラーの問題をはじめ、厳しいケアの現実を、今我々はしばしば見るが、「大聖堂」の物語に、これからの「ケア」の在り方に対して、ある種の希望も見いだせるのではないだろうか。

参考引用文献

Gilman, Charlotte Parkins. *The Yellow Wall-Paper―A Sourcebook and Critical Edition*. Ed. Catherine J. Golden. Routledge, 2004

『ケアの倫理とエンパワメント』 小川公代著　講談社　2021 年

『もう一つの声で－心理学の理論とケアの倫理』キャロル・ギリガン著　川本隆史/山辺恵理子/米典子　風行社　2022 年

『ケアする惑星』 小川公代著　講談社　2023 年